

聖路加国際病院

【基本情報】(2019年度)

・病床数：520床 ・入院料：急性期一般入院料1
 ・看護職員数：906人／うち外来看護職員数：186人 ・外来患者数：2,700人／日

在院日数が短縮化する中、外来や地域での看護の重要性が増している。外来での看護職によるアセスメントは、患者のQOL維持や再入院の予防、病床などの医療資源の有効活用にも貢献している。

本連載の第2回では、聖路加国際病院心血管センターの3つの看護外来での取り組みを寄稿で紹介する。

心血管センター

ナースマネジャー／急性・重症患者看護専門看護師

中島 千春

心臓外科術前・術後看護外来

心臓手術は、医療技術の進歩に伴い、以前であればリスクが高く施行がためられる患者や80歳以上といった高齢者の患者に対しても、安全かつ効果的な治療法となった。その一方で、DPC制度の導入により、手術前日に入院し、人工心肺使用か否かに関わらず、予定入院期間は10日前後である。

患者の生活状況やライフスタイルは、一人一人異なる。術前・術後の看護外来では、心臓手

術が企画されてから退院後は約3カ月間にわたり、患者それぞれの回復が獲得できるよう支援している。

術前の看護外来では、身体的・精神的・社会的側面から患者や家族の現状を評価し、予定通り入院したことを想定して退院後の療養生活を見据えた支援をしている。また、急性・重症患者看護専門看護師を中心に、手術を迷う患者の意思決定支援や胸痛を自覚した際の対処の指導、抗凝固薬の内服の有無と休薬期間の確認、禁煙指導、歯科受診の調整、入院にかかる費用の相談などを行っている。

退院後初回外来では特に、術後、QOLの維持や改善のため、血液データ・胸部レントゲン検査・心電図検査の結果と患者が自覚している身体症状とを合わせてアセスメントし、それを分かりやすく伝えて患者自身が体の状態を理解できるよう支援する。また、創部の保清の確認や必要な社会支援、復職時期、避妊の期間、妊娠可能時期の相談にも応じている。

慢性心不全看護外来

「急性・慢性心不全診療ガイドライン2017」によると、心不全増悪の再入院率は、退院後6カ月以内で27%、1年後では35%と高い。患者の自己管理能力を向上させることで予後は改善すると考えられるが、外来患者における毎日の体重測定や塩分制限の遵守率は約50%だ。

慢性心不全看護外来では、慢性心不全看護認定看護師のアセスメントの下、患者が心不全と上手に付き合いつながりながらQOLを維持していくことを支援する。また、患者の症状と利尿剤などの処方量や内容が適しているかを医師と相談し、症状のコントロールをサポートする。息切れ、動悸といった心不全の急性増悪時の症状が出た際には、電話相談で来院の必要性を判断し、

医師の速やかな診察と検査の調整、入院病床の調整なども行う。

心不全患者は、終末期には息苦しさや全身浮腫、体動困難といった全人的苦痛を抱く。終末期に至る前の段階から患者や家族と面談を行い、緩和ケアチーム・訪問看護師・外来看護師・医師が協働して、人生の最後を支援している。

成人先天性心疾患における看護面談

先天性心疾患の修復術後、小児期は無症状であっても、加齢の影響を受けて再手術が必要になる患者は少なくない。不整脈や心不全により、突然死に至るケースもある。妊娠・出産のリスクや手術時の輸血による肝炎の感染のほか、自己評価が低い傾向があるなどの心理的問題も残っている。こうしたことから、チーム診療が非常に重要な分野となる。

当院では、成人先天性心疾患患者の学業・就職・就業とその継続、結婚・妊娠・出産といったライフステージごとの社会生活、それに合わせた体調の維持と管理、精神・心理面に対して看護相談を行っている。病を持ちながらもQOLを維持し、患者が望む日常生活・社会生活を送れるよう支援している。

看護外来の連携と今後の展望

この3分野の看護外来は、互いに協力し患者を支援している。心臓手術を受けた患者の心機能が低く、引き続き心不全症状の観察が必要な場合は、慢性心不全看護外来に患者を引き継ぐ。また、先天性心疾患患者の手術が決定したこと、将来の妊娠を目標に心臓手術を決意したことなどの情報を共有し、術前・術後の看護外来で支援を継続している。

今後は、診療報酬上の評価につなげるためにも、看護外来の効果を明確にしていきたい。